



Title	環境刑法における法益保護：環境媒体侵害の刑法的規制を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	梁, 小煒
Citation	北海道大学. 博士(法学) 甲第15705号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91977">http://hdl.handle.net/2115/91977</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Liang_Xiaowei_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（法学）

氏名：梁 小煒

審査担当者	主査 教授	小名木 明宏
	副査 教授	城下 裕二
	副査 教授	松尾 誠紀

### 学位論文題名

環境刑法における法益保護  
—環境媒体侵害の刑法的規制を中心に—

本論文は、ドイツ、中国、そして日本の3か国の環境犯罪を研究対象とし、環境媒体（水域、土壌、大気等）の侵害に関する罪における保護法益及び犯罪態様の問題の解明を試みている。

序章では、「公害犯罪」と「環境犯罪」との相違を明確にし、本稿の問題意識を提示する。外部環境に排出する汚染が人間の生命、身体を危殆化するという伝統的な公害犯罪とは異なり、現在の環境犯罪は地球生態系としての自然環境の維持に直接対処するものであり、自然環境そのものが環境犯罪の保護法益となり得るか、また、刑法上それがどのように保護されるべきかを論じる。

第1章では、ドイツ刑法上の環境犯罪について検討を行っている。まず、自然環境侵害の罪の保護法益に関して、伝統的な個人的法益を基礎とする「人間中心主義」と、現世代及び未来世代の人間の生活基盤という環境法益の維持を目指す「折衷的生態・人間中心主義」との間の対立について検討し、人間中心主義を支持する一元・人格的法益論は、人間の自由な発展の「基本的外部条件」の要保護性を否定するという点を疑問視し、二元的法益論に基づいて、環境財は現実的客体として存在的側面を備え、かつ、限りある生存・発展条件として価値的側面も備えているものであり、環境法益の保護を支持する折衷的生態・人間中心主義は合理的であるとしている。そのうえで、ドイツ刑法324条「水域の汚染」を素材として、環境媒体の侵害の犯罪態様を検討し、従来の「侵害犯」は環境法益の侵害プロセスの対処に限界があり、異なる解釈が必要であるとし、行為と法益侵害との間の事実的な因果性が欠けるものの、大規模な危険を防止する観点から、同種行為による「現実的な蓄積効果」を予防するべきだという「蓄積犯」の構想が支持されるべきであることを示し、軽微性の原則に鑑みて、個別の蓄積寄与への刑法的規制は不法の「重大性のハードル」を考える必要があること、環境媒体の侵害について、「環境の自浄力」の程度が可罰的不法の基準となり得るが、これはなお不明確であり、さらに具体化されるべきであること、そして、水域汚染罪の場合、水域外部の影響要素を考慮し、「動植物存続を侵害し得る」水域汚染を刑法上許されない蓄積寄与と評価することがあり得るということを明らかにしている。

第2章では、中国刑法上の環境犯罪について検討を行っている。中国憲法51条における「国家的、社会的、集団的利益」の保護の要請は集合的法益の保護根拠となり得るので、第1章で述べた、人間社会の存続のための自然環境という集合財を保護法益として把握する折衷的生態・人間中心主義は、中国の環境刑法にも適用し得るということを明らかにする。また、中国刑法338条「環境汚染罪」の保護法益は自然環境そのものであり、その価値的側面はドイツの場合と同様に、現世代と未来世代の基本的生存・発展条件の維持にあるとする。そして、環境汚染行為の犯罪態様を検討する際に、第1章で述べた蓄積犯の構想が適用し得るということを明らかにする。環境

汚染行為の「重大性のハードル」については、中国に特有な司法解釈がすでに可罰的な汚染行為や汚染規模の態様を提示しており、重大な蓄積寄与の明確性には問題がないことを明らかにする。

第3章では、日本刑法上の環境犯罪について検討を行なう。日本の多くの環境刑罰法規は「生活環境」を保全対象としているが、この「生活環境」の保護は「自然環境」の保護を排斥するものではない。不特定多数の個人の利益に関する公共危険罪を除き、「社会的・国家的法益に対する罪」では、個々の人間の代わりに、自由な発展に資する存在としての公共的生活基盤を第一義的な保護財とすることができるので、自然環境それ自体は集合的法益の一種として、環境侵害に関する刑罰法規の保護対象となり得る。その要保護性については、環境財の価値的側面である「未来世代を含む人類の生存と発展の保障」は、日本国憲法25条の生存権及び13条の幸福追求権から導き出されるということが明らかにする。そのうえで、廃掃法16条の「不法投棄罪」を手がかりに、環境媒体の侵害の犯罪態様を検討する。その際、主に蓄積犯適用の試論を行ない、不法投棄罪の場合、廃棄物の不法投棄行為が環境負荷であるとするのであれば、生態学的法益への「蓄積危険」のある行為と評価することができる。その上で、「みだりに廃棄物を投棄する」という構成要件の適用範囲はあまりにも幅広いので、蓄積構成要件と軽微性の原則とを調和させるために、刑罰的処罰に値する不法投棄行為は、社会的に認容される不法の程度（環境の自浄力の程度）を越えるべきである。蓄積寄与の「重大性のハードル」を具体化する基準としては、前述したドイツと中国での検討が参考となり得るということを示している。

第4章では、これまでの考察を総括し、日本法への示唆及び残された課題を論じる。日本法への示唆としては、第1に、保護法益の内容について、一元的・人格的法益論の解釈方向には限界があるということが明らかとなった。それゆえ、環境犯罪のみならず、社会的・国家的法益に関する他の犯罪の場合も、公共的制度や社会的基盤等それ自体の要保護性（集合的法益としての適格性）は、個人的法益に還元する代わりに、それぞれの価値的基盤（及びその憲法的根拠）と存在的基盤についての検証によって判断されるべきである。そして第2に、刑事罰の過度の適用を制限するために、環境犯罪の構成要件の適用範囲を一定の基準により具体化すべきだということを示した。社会上忍容され得る限度に相応しい「重大性のハードル」を見出さなければ、刑事罰の「比例原則」に違反するおそれがあるからである。また、残された課題として、一国の環境刑法の域外適用の問題及び環境犯罪の刑罰制度の整備という将来の課題を提示した。

このように本論文は、環境犯罪の保護法益の問題をドイツ、中国、日本と3か国の法制度について網羅的に検討し、それぞれの法制度に特有の問題を抽出して環境刑法の意義を再検討するものである。環境犯罪の保護法益の問題については、すでに我が国においても様々な議論がなされているが、ドイツや中国と異なり、特別法の問題として行政刑法の分野の問題であり、議論がかみ合いにくい分野であったが、本論文はこの3か国の法制度と議論をうまく融和させて、環境刑法のあるべき姿に重要な示唆を与えてくれている。とくに、1回の行為では重大な結果を生じないが、繰り返されることにより重大な結果が発生することを禁止する蓄積犯の概念を用いて環境犯罪を構成し、しかし、処罰の拡大を防ぐための制限として動植物存続の侵害適性に着目する点は、我が国の解釈にとって重要な論拠となり、その意味で大変意欲的な論文であると評価できる。

他方で、本論文に対しては、法制度の異なる3か国の十分な比較は難しい、新しい蓄積犯の概念の範囲と従来から用いている抽象的危険犯の相違が不明確である、法制度によっては蓄積犯という概念は不要ではないかなど議論がなされ、疑問も出された。また、グローバル化の進むなかでは、国境を越える環境犯罪も問題となっており、今後の課題も指摘された。

1970年代の公害問題への規制に端を発する環境刑法は、古典的犯罪類型と比べて、さほど時間がたっておらず、保護法益の概念的な分析が議論の中心になっている現在の状況において、本論文は、ドイツ、中国、日本と3か国を鳥瞰する比較法的な見地からの網羅性、環境問題という現代的な意義の重要性、問題関心の広さを備えていることから高く評価することができるものであり、博士（法学）の学位を授与するにふさわしいものとして、合格と判断した。